

## 美容と美術の共同プログラム

### 2016年美容・美術教員作品展示報告より

A Joint Program of Beauty Care and Art

From the 2016 Exhibition Report on Works of Beauty Care Teachers and Art Teachers

富田 知子<sup>1)</sup> 秋田留美<sup>1)</sup> 下家由起子<sup>1)</sup> 平田昌義<sup>1)</sup> 山本恵子<sup>1)</sup>  
 文元麻理香<sup>1)</sup> 町田喜代実<sup>1)</sup> 八槇 達也<sup>1)</sup> 石田 佳菜<sup>2)</sup> 佐藤 亮太<sup>1)</sup>  
 栗本佳典<sup>1)</sup> 菊池信二<sup>2)</sup>

#### 抄録

山野美容芸術短期大学という名称から伺われるように、本学では美容と芸術は教育内容の中心的な意味を成すものとして、扱われている。しかしながら、各授業で取り扱う教育内容の抽出と、それらを意図的につなげていく取り組みがこれまで少なかった。今回、芸術に関する美術教育と美容に関する美容技術教育を同一テーマで進める実践を試みた。「アール・ヌーボー」、「アール・デコ」というテーマに沿って、美術教育に関わる教員と美容技術に関わる教員によって作品の形に仕上げた。美術教育と美容技術教育が同じテーマで関わることで、教育的コンセンサスを得られた。

また、今回教育の過程と成果を改めて教員が意識する事と学生に対し本学の美容芸術の一側面を示すという意味を含め、制作した作品を学内で展示を行った。

キーワード：美容技術教育 美術教育 アール・ヌーボー アール・デコ

#### I. 背景

山野美容芸術短期大学では、創立以来美容と芸術の双方の教育が行われてきた。美術教育としてデッサン、絵画、造形に関する科目をおき、その中に美容を意識した課題を課すよう工夫している。美容師は、技術はもちろん、造形感覚を育む必要がある。美容技術教育では、ヘアデザイン、メイクデッサンに従ってヘアスタイルやメイクを作る場面をつくるなどして授業を行っているが、このデザインを形にする同一の教育形態を持ちながら、教員同士のコンセンサスを確認する機会が少なかった。そこで今回「アール・ヌーボー」「アール・デコ」という共通のテーマを作品にすることでコンセンサスを得たいと考えた。

実際に出来上がった作品から、お互いのコンセンサスが得られた。

#### II. 方法と目的

今回は、まず美容教員が、美術教育を学び、デザインをより意識した作品の制作へつなげ、美術教員も美

容教材を用い同じ美術様式をテーマとした作品を制作することで美容への理解の深める、双方の可能性を示唆できると考え以下の方法を用いた。

美術教員から①今回のテーマである「アール・ヌーボー」と「アール・デコ」についての講義、②立体造形の展開の可能性についての演習、③その上で①のテーマに沿った美容作品を制作することとした。

①のテーマである「アール・ヌーボー」とは、「1869年にパリに開いた室内装飾店の名前に由来。・・・世紀末のヨーロッパ各国で流行した。」<sup>(1)</sup>その装飾の特徴は「先端が鞭のようになって力強い動感を示す左右非対称の波打つような曲線」<sup>(2)</sup>である。「アール・デコ」とは「1920年代に発展し、30年代にピークに達した断定的な現代様式。」<sup>(3)</sup>「建築の機能主義、モダニズムと類似した単純化された直線的・幾何学的なデザインに特徴」<sup>(1)</sup>である。このように二つ様式を用いることは、対極的なデザイン要素が明確であるため、講義・演習で学んだことを意識し、デザインの構成に取り入れやすく、その教育的効果も現れやすいと考えられる。

②の演習では、作品の構成を考える際、その作品の多角方向からの視点でのイメージをもって行う考え

1) TOMITA Tomoko AKITA Rumi SHIMOIE Yukiko  
 HIRATA Masayoshi YAMAMOTO Keiko  
 FUMIMOTO Marika MACHIDA Kiyomi YAMAKI Tatsuya  
 SATO Ryota KURIMOTO Yoshinori

山野美容芸術短期大学

連絡先：〒192-0396 東京都八王子市鎌水 530

2) ISHIDA Kana KIKUCHI Shinji

山野美容芸術短期大学非常勤講師

方を補填し強化することを目的としている。

③の制作においては、高さ 20 cmのミニマネキンを使用することとした。このマネキンには人毛が植毛されており、美容技術を施すために作られているマネキンである。小さいものを使用することにより、実際の人頭の大きさと比較し短時間で試行錯誤が可能である。

### III. プログラムの構成

作品を完成させるにあたりその流れをプログラムとして示す。

1) は、方法①②の美術教育、2) は方法③の制作に関わる技術教育である。

#### 1) 美術教員による演習授業

本学で絵画を担当する栗本、デザインを担当する菊池、美容デザインを担当する富田がそれぞれ下記のテーマで講義及び演習をおこなった。これは、デザインを発想するための基盤とする位置づけである。通常美容技術授業では技術的側面からの制作アプローチが大切であるが、今回はコンセプト作成からの制作アプローチを目指した。

(1) 栗本 (美術教員) による演習：立体の展開図をもとに新しい形を考え出し、立体造形の可能性を探る (写真 1～3 参照)。



写真 1.講義風景

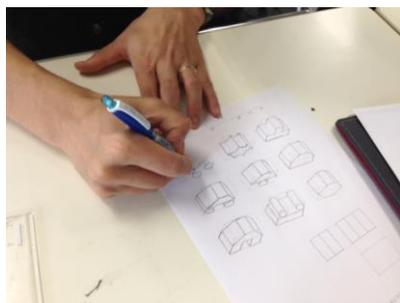


写真 2.一つの平面図形から展開図を描く

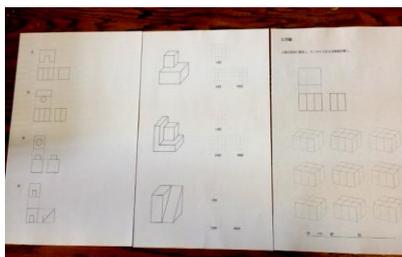


写真 3.使用した資料

(2) 富田 (美容教員) による講習：美術様式と美容について学ぶ。

今回のテーマ、アール・ヌーボーとアール・デコの様式の主たる作品と当時の美容について資料を用いて講義を行った。

(3) 菊池 (美術教員) による演習：アール・ヌーボーとアール・デコの様式を基に、文字からイメージするロゴデザインを行うことで、色・質感・形との関係を学ぶ。(写真 4)



写真 4.講義風景

#### 2) 美容技術アプローチと作品制作

##### (1) 美容造形としての技術講習

方法の③でおこなうミニマネキンを使用した美容作品制作は、日常のサロンスタイルに留まることなく、美術様式を意識したコンセプトを重視した表現を目的とした造形作品としての要素が強い。そのため、表現技術は通常のサロンワークにおいて使用する技術以外の技術の工夫が必要となる。この工夫は、美容教育に生かせるものであると考える。そこで、技術的な展開を強化するため、2015 年、技能五輪国際大会において (国際技能競技大会 World Skills Competition) 敢闘賞受賞した森海氏 (西原美容室所属) による技術講習をおこなった。この大会は、理美容の技術を 4 日間で 8 種目を行う、高い技術と芸術性が問われる大会であり、そこに使用されている技術は、美容師が日常触れる事がないものも多くみられる。このような技術者の講習を受けることは技術の新しい発見に繋がると考えた。線である毛髪を短時間に面の状態にする技術、色をいかにヘアスタイルに配置し、効果的にデザインに反映させるかなどの技術において、具体的に学ぶことができた。量、長さ制限のある毛髪で、デザインの広がりを見せ、作品のコンセプトをいかに強く人に印象付けるのかは、細やかな技術と美的視点が必要であることが示された。(写真 5～7 参照)



写真 5.森田氏の指導者西原弘幸氏による実技講習



写真 6.世界技能五輪第 2015 年日本代表者  
森海氏による技術講習



写真 7.西原美容室作品例

### (2) 作品制作

上記 1) 2) の過程を経て、各自作品制作を行った。  
次の①と②を共通の課題とした。

①高さ約 20 cm のミニマネキンを使用した。マネキンの頭毛は人毛で、カラーリングなども可能である。

②大きくテーマを 2 つに分けた。菊池の授業で取り上げた、「アール・ヌーボー」様式と「アール・デコ」様式である。どちらかの様式を選択し、そこからコンセプトへと繋げた。

### (3) 作品展示

教員が制作した全作品を学内で展示した。インスタレーションの形でおこなった。(写真 8~10 参照) 河合 (2007) は、ユリアーネ・ベンティッシュのインスタレーション・アートの作品の概念について触れ、「自立的な対象としてではなく、作品と観客との間で生起する体験として捉え直される」<sup>(4)</sup>と指定している。さらに、「インスタレーションの本質は、〈特定の場〉とそこに設置された装置とによって構成される環境、そしてそこで行為する観客の身体との関係性において、初めて作品として成立することにある。」<sup>(4)</sup>としている。

今回は、美容技術のみが鑑賞の対象ではなく、そこにあるコンセプト表現を意識した作品であるため、展示空間についても意識し、個々の作品が一つの世界観を出すような方法としてインスタレーションという

方法を選択した。具体的には、囲まれた空間に、土台を付けた富田の作品(写真 8 左下部分)と、画像加工した八槇の作品(写真 10)以外は一本の支柱(写真 11)でマネキンを展示した。これは通常の練習用マネキンランプ(写真 12,13)を避け支柱に意識がいかないようにし、また、美容技術訓練の場面から離れて鑑賞してもらうためである。しかし、吉村 (2014) は、「鑑賞教育の認知心理学」において鑑賞するという事について「観察力のトレーニングという面を持つ」<sup>(5)</sup>といているように、学生にとって技術的な教育素材としての効果も含まれている。



写真 8.展示風景



写真 9.展示風景



写真 10.展示風景：平面に落とし込んだ作品の展示(八槇の作品を参照)



写真 11.支柱



写真 12.練習用クランプ



写真 13.クランプを使用した実習風景

- ①Souffle (スフル)
- ②アール・ヌーボー
- ③植物 (リーフ)、曲線
- ④植物の息吹
- ⑤頭部土台部分を6つにパーティングし、コントラストを表現するためパートごとにブリーチシトーンに変化をつける。それぞれのパートをすき毛でボリューム調整をしながらまとめる。トップには3色の付け毛を用いて作製した植物のリーフを装飾。本物の葉に近づけるために三つ編みを用いて葉脈を表現。
- ⑥頭部：すき毛、ブリーチ剤、ヘアマニキュア(ラベンダー・クリア)
- 装飾：付け毛(ホワイト・イエローブラウン・ブラウン)
- その他装飾：付けまつげ(ホワイト)、布地(ホワイト×クリーム)、ラメスプレー(シルバー)
- ⑦320×200×170 (mm)
- ⑧アール・ヌーボーの特徴である植物や、流れるような曲線をイメージし、制作。植物のリーフは以前発表した作品にも取り入れたことがあるが、今回はミニウィッグへの装飾ということもあり、小さめの葉を作製するうえではさらに繊細さが求められた。リーフ以外はすべて地毛によって、横方向に流れる曲線を表現したが、アール・ヌーボーという観点から全体を見ると、その要素をもう少し取り入れる必要性があったと考える。

#### 4. 作品報告

##### 1) 作品展示風景

展示会場は、講義棟入口横にあるスペースを利用した。期日は第1回目 2016年5月10日から1週間。

##### 2) 教員作品

各教員の作品をここで紹介する。美容教員8名 美術教員1名である。

各作品の報告は以下のフォーマットに従い記載する。

氏名(専門)、作品写真、①～⑦の制作者による作品説明

- ①タイトル ②選択様式 ③イメージソース ④コンセプト ⑤制作方法 ⑥使用材料 ⑦作品サイズ
- ⑧今回のプロジェクトの考察

#### ■ 下家由起子 (美容教員)



- ①L y s (ユリ)
- ②アール・ヌーボー
- ③アール・ヌーボーを代表する二人の芸術家、アルフオンス・ミュシャのグラフィック作品とルネ・ラリックのジュエリー
- ④ミュシャがデザインし、ラリックが制作した冠「L y s (ユリ)」、サラ・ベルナルの舞台のために作られたものである。ブリキでできたその冠は舞台上で花開く彼女をより美しくした。芸術家二人の使用する色合いをヘアカラーで工夫し、そのベルナルの女性らしさを編み(ブレイド)の曲線で表現した。また、イニシャルデザインで行ったYとS(たまたま

#### ■ 秋田 留美 (美容教員)



ではあるが) 本作品の題名と一致した。

⑤ブリーチ(2回)、ブロッキング後トーニング(部分シルバー)、カラーリング、スタイル制作、アクセサリ

⑥ヘアアクセサリとしてビーズ

⑦220×230×160 (mm)

⑧アール・ヌーボーとアール・デコ、この様式は古典とモダンをつなぐ架け橋となっているものである。その架け橋となる思いを、作品を、教員が各々のかたち

にすることによって一つの世界が誕生した。今回、一番苦勞したのはカラーリングである。イメージソースからみられるゴールドとベージュのくすんだ色合い、グリーンの存在感、そしてアクセサリの(ダイヤのような輝きではない)光。まだ他にも表現があるという可能性を残している。

■ 平田 昌義 (美容教員)



①Bézier (ベジエ)

②アール・ヌーボー

③・ミュシャ作品の毛先が束になって動いている描写  
・曲線を使った照明やバイクの形

④曲線

⑤ミニウィッグ

1、フェイスラインやボリュームのいらなところをストレートパーマ液でつぶす。

2、右フェイスラインからバックにかけて曲線ラインをカットする。

3、右半頭の長さを調整し脱色を行う。(ブリーチ8回)

4、根元部分に色を入れる。(ヘアマニキュア、オレンジ、バイオレット、ブルー、レッドを使いグラデーションになるように染色)

5、ヘアアイロンを使い、動きを付ける。

6、全体のバランスを整え、スプレーで固める。

7、プラスチック容器は、柔らかな曲線が出るようにカッターで削った。

⑥プラスチック容器・カラー毛束

⑦270×200×160 (mm)

⑧今までの自分の作品傾向であればアール・デコを選び作品を制作したほうがイメージを膨らませやすかったのだが、今回は新しい考えを増やすためにもアール・ヌーボーを選び作品制作を行った。その時代の建造物やミュシャの作品集などで印象を受けたのは、曲

線である。その滑な曲線を、プラスチックの台座と共にヘアのアウトライン、毛先の動きで表現した。曲線を見せる事が出来た。カラーに関しては、まだ改善が出来ただろう。

■ 山本恵子 (美容教員)



①Circle from a straight line

②アール・デコ

③直線 円形 左右対称 幾何学的形体 影絵

④私の中でのアール・デコ

⑤黒染め パーティン グ ツイスト スタイル制作

⑥ファイバー 発泡スチロール モール 樹脂  
アクリリックペイント

⑦300×150×150 (mm)

⑧作品のテーマである、アールヌーボー・アールデコは共に建築や家具、絵画などのデザイン様式に魅力を感じるモノばかりである。幼い頃から、左右対称のモノを好んでおり今回の作品はアール・デコから直線、左右対称をモチーフに制作した。さらに追及していきたいテーマである。

■ 文元麻理香 (美容教員)



①躍動

②アール・ヌーボー

③ゼンタングル、ヘナアート、マンダラ

④曲線美

⑤

1、ウィッグにイメージしたスライスを取り、編み込んでいく。

2、顔にイメージした柄、模様を縁取り書いていく。

3、書いたものにエアブラシで色を付けていく。

4、あらかじめ用意していた付け毛を全体のバランスを見ながら編み込んだ毛先に付けていく。

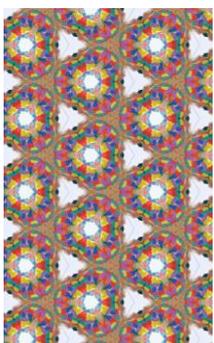
- ⑥カラー剤（レベル 13）、付け毛、エアブラシ、カラーペン、
- ⑦220×210×210（mm）
- ⑧イメージソースにヘナアートなど細かい曲線があるものを選び、動きのある絵柄を描いた。色はあえて大まかにエアブラシを使い着色し、模様が協調されるようにした。ヘアに関しては、曲線を意識したスライスを取り丸みのあるラインを強調した。編み込みもなるべく細かく毛を足していきスライス線がしっかり見えるよう編んでいった。もう少し全体的にウィッグへの模様を増やし、まとまりがあればもっと良かった。

■ 町田喜代実（美容教員）



- ①courbe
- ②アール・ヌーボー
- ③アール・ヌーボー様式に見られる植物的な曲線
- ④曲線と膨らみ
- ⑤イニシャル文字のデザインからはじめ、その線の広がりをもとにヘアスタイルを制作した。カラーは植物をイメージし、文字とヘアで同じように揃えた。
- ⑥ヘアピン・黒ゴム・ブリーチ剤・ヘアマニキュア・整髪料
- ⑦270×140×170（mm）
- ⑧普段使い慣れない小さなサイズのウィッグの扱いが最初の問題だった。ウィッグという考えを捨て、別の一つの材料として考え作品を制作する必要があったと考える。文字や毛先の動き、またカラーを揃えたことで、文字とヘアスタイルに共通イメージを持たせられてのではないかと考える。最後に、ウィッグの髪をいかに傷ませずに、カラーを施すか課題が残った。

■ 八槇達也（美容教員）



- ①温故知新
- ②アール・デコ
- ③万華鏡、折り紙、リーゼント、学ラン
- ④温故知新×万華鏡×リーゼント
- ⑤全頭のブリーチを7回 → 紫トリートメント → カット → 9mm 前後のロッドで水巻き(1日放置) → ヘアセット → 折り紙で装飾 → 撮影
- ⑥ブリーチ剤、過酸化水素水、紫トリートメント、折り紙
- ⑦ウィッグ：250×200×200（mm）  
フォト：100×148（ミリ）
- ⑧イニシャルをアール・デコで作成したことにより、制作した作品もアール・デコをイメージし作成したが、アール・ヌーボーでイメージした方が作品がより膨らんだのではないかと思う。幾何学を意識し、万華鏡のように撮影し、多くの色を使用してみたが、モノトーンにしてみても面白かったのではないかと思う。また、同じ作品でアール・デコとしてのフォト作品とアール・ヌーボーとしてのウィッグ作品の二点を展示しても良かったのではないかと思う。

■ 石田佳菜（美容教員）



- ①Haricot magique
- ②アール・ヌーボー
- ③ジャックと豆の木 大きな木
- ④生命力
- ⑤ブリーチ6回、各ブリーチ後ムラサキシャンプー。マニキュアでオンカラー。
- 1、左半分、幅1cmのフェイスラインの毛と幅1cmのヘムラインの毛束を分けておき、残りの毛を全て右サイドにもっていき、ネープから右フェイスラインまで平行止め。
- 2、左フェイスラインとヘムラインに残しておいた毛束で四つ編みをしながら、バランスを見て場合により崩し、毛束をランダムに四つ編みに通し、右サイドの平行止めをしたところに持っていき、ピンング。
- 3、予め丸く作っておいたすき毛でネープからロールを作っていく、バランスを見ながら崩す。
- 4、ロールを作った右耳の上にピンをとめて締めて完成。
- ⑥中野製薬会社 トナーブリーチパウダー  
ロレアル アルーリアオキシダムクレーム6%

ホーユー株式会社 グラマージュヘアマニキュア  
ワイ.エス.パーク ホワイトトルックシャンプー

⑦250×200×200 (mm)

⑧今回のプロジェクトでアール・ヌーボーを考えた時、花や植物などの有機的なモチーフや流れるような曲線が特徴という事から、生命力を感じコンセプトにし、ウィッグ作製に取り組んだ。ウィッグの左サイドに四つ編みをし、くずしながら毛束を通す事により、有機的なイメージにつなげたのだが、もう少しやわらかい曲線ができるとよかったと反省が残った。次回作製する際には、編んでくずした部分をピンでとめながら曲線を作る必要がある。

■ 富田知子 (美容教員)



①Epirrhema (エピレマ) 魚：水：草

②アール・ヌーボー

③自然

④3体のマヌカンを使用し、水と酸素、魚という生命体の「Epirrhema (間)」循環をかたち作る組成となっていることを表現した。

⑤毛髪の色脱色：各ミニウィッグ5回 染色 ヘアアイロンによる形状加工

⑥ブリーチ剤 酸性カラー 樹脂粘土 アクリル絵の具 エアーブラシ

⑦魚：250×300×270 (mm) 水：300×300×200 (mm)  
草：300×350×250 (mm)

⑧世界大会出場者西原氏及び森氏による技術講習では繊細な色表現と的確な技術、栗本教授による「形状の認識」では多角的に形状を意識すること、菊池講師による「マテリアルとロゴ表現」では色と質感から形と関連付けることを学び、1つの流れの中で、最後のマネキンで、毛髪の色及び形での表現を明確にすることが出来た。このようにそれぞれ独立した授業が連携することを意識し組み立てることの重要性を再確認することが出来た。

■ 佐藤亮太 (美容教員)



①Dryas

②アール・ヌーボー

③木の精霊

④女性の持つ内なる強さとやわらかさを、木の生命力とその木に引きよせられる植物にリンクさせて表現した。

⑤髪を3回ブリーチした後、緑色のマニキュアを塗布丸みや立体感を出す為、ねじった髪を所々ひきだしながら大小混ぜてとめた。

顔はエアーブラシで白色に着色、ラインストーンをボンドで固定した。

土台はスポンジと針金で小さな木を作り、人工の草を土台と顔にボンドで固定した。

⑥ブリーチ マニキュア エアーブラシ 針金 スポンジ 人工植物(草) ラインストーン 紙の土台

⑦250×260×180 (mm)

⑧自然を意識し、今回は木の生命力からのインスピレーションを表現した。

ウィッグの髪の扱いは慣れているが、顔や土台を含めてイメージを表現するのに苦労した。

初めての素材にふれる事により、新しいイメージが沸き制作に取り組むことができた。

■ 栗本佳典 (美術教員)



①a plant

②アール・ヌーボー

③植物の発芽

④発芽からどんどん成長する植物の生命力を表現

⑤髪のを4分割し、高さを出すためにメディウムで固めた。体から生えた芽や頭から伸びた蕾は紙粘土で作った。全体にラッカースプレーで着色し、部分的にアクリル絵の具で着彩した。

⑥紙粘土、ジェルメディウム、ラッカースプレー、アクリル絵の具、砂、植木鉢

⑦540×300×300 (mm)

⑧普段は、生命の神秘をコンセプトにした版画作品を制作しており、植物はよく用いるテーマである。今回は初めてウィッグを使ったが、髪の毛が思った以上に扱いが難しく、イメージ通りの形を作るのに苦労した。しかし、全く新しい素材だったので、とても新鮮な気持ちで制作できた。

#### IV. 結果と考察

教員の制作後のコメントから、テーマである「アール・ヌーボー」と「アール・デコ」の様式美を意識的に制作していることが分る、その点で八槨の「・・・アール・ヌーボーでイメージした方が、作品がより膨らんだのではないかと思う・・・」など、その様式美を通しての作品への振り返りも行えている。これは、初めに行ったテーマの様式美に対する演習により、イメージが明確になっていたかと考えられる。このことから、今回の試みで、本学の中心的な美容技術教育と美術教育は密接に関わることが分かった。栗本の制作後の考察にあるように、美容教員には慣れ親しんでいる毛髪という素材の扱いの難しさを認識し、また新鮮さを感じるという新しい気づきをもたらしている。この気づきについては、美容教育に必要な美術教育の新たな試みに繋がる可能性がある。

コンセプトをどのように形として表現するのかという段階では美容教育においても、美術教育においても共通性があり、バランス、質感、調和等の感覚をより発達させるためには、美術教育が美容教育にとって不可欠なものであること、また美容教育場面での美術教育の在りかたについてさらに検討できることが示唆された。

本研究により美術がどのように美容教育につなげられるのかという指標となり、今後学生に美容と美術とのつながりと意義を提示することで、学習の動機づけと発想力の向上につなげていきたい。

その後、今回は学生には作品の展示という形での提供となった。そして、学生からは「作品の作り方が知りたい」「イメージをどのように表現するのかわかりました」等の意見が多くあり、展示をしたことの学習の動機づけとしての効果があったと考える。しかし、美容デザイン専攻2年の学生(141名)へ、展示を観たか否かを問うたアンケートでは、観たと答えた学生が43%に留まり、観ていない学生の内25%が展示に気づいていないことが分かった。「また場所が分かりにくい」という学生の記述もあった。このことから、学生への教育効果を高める提示のしかたや、発想力を向上させるために実際の教育内容に今回の方法を取り入れるといったことが今後の課題である。

#### 参考文献

- 1) 益田朋幸・喜多崎親編(2005) 岩波西洋美術用語辞典 岩波書店 p 20 - 21
- 2) S.T.マドセン (1970) 高階秀爾訳 アール・ヌーボー 平凡社 1970年 p38
- 3) ベヴィス・ヒリアー (1986) 西澤信彌訳 アール・デコ PARCO 出版 p37
- 4) 河合大介 (2007) 自律性から関係性へ：インスタレーション・アートにおける観客と作品の交叉 第58回 美学会全国大会要旨 p 143
- 5) 東健一、吉村浩一 (2014) 鑑賞教育における認知心理学 教育新鋭学年報 第53集 p 214

#### 文献紹介

- 1) 富田知子 秋田留美 (1993) アール・デコの線、形、素材感を反映したヘア・デザインの制作 山野紀要 vol.2 p79-87
- 2) 富田知子(1995) アール・ヌーボー期の人体とヘアスタイルにおけるバランス表現の特性 山野紀要 vol.4 p1-11
- 3) 富田知子(1996)新古典主義期における人体とヘアスタイルのバランス表現の特性, p9-18
- 4) 富田知子他(2010)「学外作品発表「epirrhemat-エピレマ」展 美容作品の可能性と、その展示方法の考察 山野紀要 vol.18 p 84-102